

## 序

私は平成二五年四月二三日付けで鶴鳴学園から完全撤退し、五〇年に及ぶコーチ人生に終止符を打った。気力や体力が衰えた訳ではないが、人生の節目としてのやむを得ない選択だった。その経緯から話そう。

実は私は、長崎インターハイが開催された平成十五年には六一才になり、インターハイを迎える前に定年退職の年齢に達していた。しかし理事長は私の定年を一年伸ばし、私にインターハイの指揮を執らせてくれた。さらにインターハイ後理事長は、私を短大に移籍させ、引き続きバスケットボール部の監督をやらせてくれた。理事長の特別の計らいの裏には、平成二六年に開催される二巡目の長崎国体で、山崎純男をして再び鶴鳴の名前を全国に知らしめたいという強い思いがあった。にもかかわらず私は理事長の期待に応えることができなかった。平成二一年度から二四年度まで連続四年間全国大会どころか、県内の全ての大会ですら優勝できなかったのである。そうなれば、私は理事長から特別扱いをしてもらう理由は何もない。

というわけで、私は平成二五年三月三十一付けで鶴鳴学園を退職したが、新任の田口監督との引き継ぎ期間という意味も含めてバスケットボール部の指導は夏の大会まで山崎主導でやることになった。関係者にはその経緯を次のような文面で知らせた。

結論から言います。三月三十一付けで私は退職しましたが、学園との話し合いにより県高校総体まで現体制で行くことになりました。県高校総体で負ければ六月五日以降私はクレインズバスケットボールに全く関与しませんし、勝てばインターハイまでは関与しますがインターハイで負けた時点で私はクレインズバスケットボールから永遠に離れます。これは、本当に私が望んでいた結論ではありません。私個人のことを考えれば他の選択肢もありましたし、現役選手のことだけを考えればもっとよい方策があると思いますが、いろんな立場の人（県・学園・高校・選手・保護者・卒業生など）のことを考えると、ここらへんが落としどころかなあという結論です。

と、簡単に七行の文章でまとめていますが、二月以降あの人この人の立場のことを考えて悩み抜き、自分の中の葛藤と闘いながらこの結論に至りました。その経緯については時効が来たらお話しいたします（時効が、私の生存中に成立するのかわかりませんが…）

しかし、高校総体まで継続と宣言した二週間後、私は校長にコーチ辞任願いを提出して鶴鳴学園から完全撤退した。理由は、四月の県下春季選手権大会で四位にしかならなかったからである。四月二二日の午後、三位決定戦に臨む前に私は「ここが引き際だ」と思い、翌日辞任願いを提出した。辞任理由には次のようなことを書いた。

クレインズチームは二月中旬の九州春季大会以降力をつけ、さらに春休み遠征の結果でもそのことは証明され、選手たちの中にも「今年はいける」という自覚がこの二ヶ月間で芽生えてきたのがつきりと見て取れた。しかし、県下春季選手権大会の準決勝では、これまで指摘され続け、改善すべく努力を積み重ねてきたはずの選手個々の弱点がごとごとく露呈し、地区新人戦と同様の結果になってしまった。このような試合をしてしまった彼女たちは当然「またやらかしてしまっただ」と思っているはずである。そんな状況の中でこのあと私が指揮を執り続けると、私は選手にとって「教えて貰う」という存在よりも「監視され続ける」という存在となり、選手のよい面を引き出してやることはできない。選手のよい面が表に出てくるようにするためにには選手たちを山崎純男の呪縛から解放させてやるのが最善策である

鶴鳴の選手たちにとつての最善策だと思つて私はこうして身をひいたが、私個人としては命尽きるまでコーチを続けたいと今でも思っている。「ああすればよかった。こうすればよかった」という思いがたくさん残っているからだ。でももう、そんな思いをコートでは実践できない。ならば文字に残そう。私はキーボードに向かい、山崎純男の回顧録を書き始めた。内容は、各章毎その年度の試合案内報告をもとに、その当時は公開できなかったエピソードなどを加えて書き綴っていく。

年度というのは、その年度に三年生になる選手たちの年度のことである。通常日本で用いられる年度の意

味は四月から翌年の三月までだが、回顧録の年度は新チームに切り替わる一〇月の地区新人戦から、当該年度十二月のウィンターカップまでとする。

なおこの回顧録は出版しない。ホームページ上で加筆修正を繰り返し、その都度アップデートする。

平成二五年四月三〇日

山崎 純 男

## 目次

第一章 クリスマスノート	【平成二二年～二四年のできごと】
一 クリスマスノート	
二 末っ子軍団	
三 末っ子軍団の足跡	
四 体育学会	
五 F I B A A S I A女子選手権大会	
六 母	
第二章 低迷	【平成九年度～十一年度のできごと】
一 無風	
二 心因性 症候群	
三 光明	
第三章 富山国体	【平成十二年度のできごと】
一 昭和初期の電気製品	
二 SEGOND骨折	
三 膝蓋骨折	
四 村八分	
第四章 強化方針	【平成十三年度のできごと】
一 強化方針	
二 新潟姉妹	
三 熊本インターハイ	
四 みやぎ国体	
五 ウィンターカップ	
第五章 魔物	【平成十四年度のできごと】
一 リクルートゼロ	
二 魔物	
三 ジャトウ(一)	
四 デング熱騒動	
五 財政	
第六章 長崎インターハイ	【平成十五年度のできごと】
一 谷川復帰	
二 ジャトウ(二)	
三 いよいよ本番	

- 四 投書
- 五 浜松国体
- 六 ウインターカップ

第七章 埼玉国体

【平成十六年度のできごと】

- 一 移籍
- 二 沖縄
- 三 新潟地震

第八章 船橋インターハイ

【平成十七年度のできごと】

- 一 新車
- 二 ACL
- 三 ミヤー
- 四 膝崩れ（GIVINGWAY）

第九章 兵庫国体

【平成十八年度のできごと】

- 一 ジュニアオールスター
- 二 再びACL
- 三 兵庫国体

第二十章 無冠

【平成十九年度のできごと】

- 一 レイノー
- 二 復活
- 三 関西ATフォーラム
- 四 留年

第十一章 埼玉インターハイ

【平成二〇年度のできごと】

- 一 カリフォルニア
- 二 残り一秒
- 三 アメリカ遠征
- 四 高城台ミニバス

第十二章 瓦解

【平成二一年度のできごと】

- 一 ドロップアウト
- 二 ジエイソンライト
- 三 NIDUS
- 四 ジムクレメンズ

第十三章 幕引き

【平成二二年度のできごと】

- 一 満身創痍
- 二 ユリア
- 三 ハワイ